

聖書の学び／2004年

桑 栄 一

- 1月1日(神の母聖マリア) 神の母聖マリアは、これらの救済史の出来事を心に納めて思い巡らす女として描かれています。彼女は使徒たちと共に、主イエスの受肉と受難と復活の証言者として、私たちの中に立っているのです。復活して父なる神の右の座にお着きになった天上のキリストが、ミサをささげる地上の教会の祭壇で私たちに出会ってくださるとき、そこには使徒たちおよび神の母聖マリアも共に証言者として私たちの中に立っているのだということを信じましょう。
- 1月25日(年間第3主日) 私たちキリスト者にとって、聖書を学ぶことは神のことば(キリストの福音)を聞くことであります。ミサにおける“ことばの典礼”は、聖書を勉強して一般的教養を身につけるためではなくて、「信者に神のことばの食卓の富を豊かに与えるために」(典礼憲章 51)用いられなければなりません。なぜならそこでは、終末の日に至るまでの歴史を通して日毎に実現して行く神のことば(福音)が朗読され、説教されるからです。
- 2月1日(年間第4主日) 初代教会から現代の教会に至るまで、人々が悔い改めなければならない罪は、神のことばよりも耳触りの良い人間のことばの方に誘われるということです。信仰の有無に関わらず、“ありがたい良いお話”は人の心を潤します。しかし神の救済史の告知としての“キリストの福音”、“神の国の福音”は、信仰によらなければ聞き取ることが出来ないからです。
- 2月8日(年間第5主日) 使徒たちから伝えられ、代々の教会が受け継いで来たキリストの福音を、現代のキリスト者である私たちはもう一度聞く必要があります。なぜなら20世紀を振り返って、人間が考えたり時代が要求する“擬似福音”が、聖書が語る使徒たちが伝えた福音に代わって声高に叫ばれて来たからです。私たち21世紀のキリスト者は、福音を自分で考え出すのではなくて、使徒たちが告げ知らせた福音をもう一度聞くことに目覚めなければならないのです。
- 3月14日(四旬節第3主日) 悔い改めも信仰も、この主イエス・キリストとその福音に対するものであることが、特別に強調されなければなりません。私たちのキリストは十字架と復活のキリスト(ロマ 8:34)であり、終末の日に生きている者と死んだ者を裁くために来られるキリスト(IIテモ 4:1)であります。悔い改めというギリシア語は、向きを変えるという意味ですが、新約聖書はそれをキリストに対して、キリストの福音に対して“向きを変える”という意味で使いました。ですからキリストとは関係のないところで、ただ悪人が心を入れ替えて善人になるということではありません。またキリストの福音が語られ、聞かれていなければ、ただ不信心な者が信心深くなっても、それは聖書が語る悔い改めとは何の関係もないことなのです。
- 3月28日(四旬節第5主日) 私たちキリスト者は、聖書で語られている“罪の赦し”を、単なる情状酌量や、まして罪状をうやむやにすること等と混同してはなりません。私たち一人一人はイエス・キリストの贖いによる外は決して解決することの出来ない深い罪の中に陥っていることを、聖書の言葉は教えてくれます。「わたしの語った言葉が、終わりの日にその者を裁く。」(ヨハ 12:48)「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか。」(ロマ 7:24)「神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。」(ヨハ 3:17) この最後の引用が、ヨハネ福音書の今朝の主題です。
- 4月4日(受難の主日) 受難の主日のミサでは通常、司式司祭と第一第二朗読者、それに会衆も加わって、主の受難の物語りを交唱します。そこで私たち会衆が唱えるのが群衆の言葉の部分であることには、大きな意味があります。それらは私たちの神への背きとキリストを十字架につけた罪の言葉だからです。

神の子を十字架につけたのは、外ならぬ私たち自身であったことを、会衆はこの交唱によって再び味わいます。ピラトを犯人に仕立て上げることも、当時のユダヤ人にイエス殺しの罪責を負わせることも、聖書の意図ではありませんでした。主の受難の物語りが教会で朗読されるごとに、私たち会衆は、神の子が私たちに代わって裁きを受け、私たちの罪を担って十字架に死んでくださったことを理解するのです。

4月18日(復活節第2主日) キリスト教は、使徒たちの宣教から始まりました。イエスの生涯と死と復活は神の偉大な御業であって、人はそれによって贖いと罪の赦しを受けることが出来るという福音を、使徒たちは復活の主にならされたことを理解しました。彼らの福音はイエス・キリストについての福音、救いの福音であって、決してナザレのイエスの宗教の再現ではありませんでした。

5月2日(復活節第4主日) 第二バチカン公会議によって始まった典礼刷新は、キリスト者会衆を再びキリストの声に引き戻す方向づけを提示しました。21世紀は、この典礼刷新がいよいよその内実を具体化させる労苦と収穫の世紀となるように、私たちは期待したいものです。現代のキリスト者である私たちの課題は何よりも先ず、聖伝と聖書を通してキリストの声を聞き分けることにあります。イエス・キリストは死者の中から復活して、すべて信じる者に永遠の命を与える救い主となりました。“キリストの声を聞き分ける”とは、この知らせ、この福音を信じることです。

5月30日(聖霊降臨の主日) 洗礼を受けるには先ず信仰が必要です。そして信仰はキリストの福音を聞くことによって始まります(ロマ10:17)。ですから、現代の教会が聖霊の賜物によって豊かにされるには、何よりもキリストの福音が、使徒たちが伝えた通りに、再び生き生きと宣教される必要があります。

6月6日(三位一体の主日) 三位一体論の古典的表明として、5世紀頃の「キクンケ・ウルト」(通称アタナシオス信条)という文書があります。この文書はカトリックの信仰を定義して、次のように述べています。「我らが一つなる神を三位において、三位を一体において、礼拝することである。」(3) そして非常に明瞭な表現で、次のように宣言します。「かくの如く、御父は神であり、御子も神であり、聖霊も神である。」(15) 「しかも三つの神ではなくて、一つの神である。」(16) この三位一体の教義が軽んじられるときにはいつも、歴史の教会の危機があったということが出来ます。そして現代のキリスト教にとっても、その危機は決して無縁ではなく、むしろいろいろと形を変えて深刻な問題を生み出しています。

6月20日(年間第12主日) ラッツィンガー枢機卿(現教皇)の発言(神学ダイジェスト No.93)を紹介。…カトリック教会の中での何らかの係争によって、ミサへのふさわしい参加の機会を奪われている小羊たちにとっても、この発言は今朝の聖書のテキストの理解への助けとなるのではないのでしょうか。一地方教会との関係に困難が生じているときにも、洗礼を受けたキリスト者は確かに普遍教会に属しているのですから。

7月4日(年間第14主日) あなたは聖霊を受けていますか、あなたはキリストの霊を持っていますか(ロマ8:9)と質問されて、確信が持てずしどろもどろでしかない信者たちに、“あなたは福音を信じたのだから聖霊を受けているのです”と教えるために、司教と司祭はキリストによって派遣されているのです。教会憲章8の次の言葉は、信徒と教導職の区別なく、21世紀の教会のすべての者の祈りの課題であります。「自分のふところに罪人を抱いている教会は、聖であると同時に常に清められるべきものであり、悔い改めと刷新との努力を絶えず続けるのである。」

7月18日(年間第16主日) 私たちの主日のミサは、入祭の歌に続く次のようなあいさつで始まります。

司祭：父と子と聖霊のみ名によって。 会衆：アーメン。

司祭：主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが皆さんと共に。 会衆：また司祭と共に。

これは、「神に呼び集められて聖霊の交わりのうちに一つになっている中心に、復活された主キリストが共にいてくださることを意識させる」(土屋吉正／ミサがわかる 31頁) ものなのですが、実際には多くの司祭がその後、改めて「お早うございます」という日常的な挨拶を付け加えることによって、ミサを人間中心の集会に変形してしまっているのが実状です。

8月1日(年間第18主日) 儀式書の緒言の中から……「教会は葬儀において、何よりも復活信仰を表明

し、…… 神の偉大なわざを記念し、感謝をささげる。それは、死んで復活されたキリストに洗礼によって結ばれた信者が、キリストと共に死を通して生命に移るよう、すなわち故人が清められて、聖なる選ばれた者と共に受け入れられ、キリストの再臨と使者の復活を待ち望むよう祈るためである。…… こうして、互いにキリストの体の部分として交わっている者は救いの業に与り、遺族、参列者は希望と慰めを受ける。…… 教会の葬儀は、…… 洗礼によってキリストの死に結ばれた者が、その復活にも結ばれることが出来るという復活への信仰を新たにし、宣言する場でもある。」

8月15日(聖母の被昇天) すべての人々の贖いとして御自身を献げられたのはイエス・キリストだけではありませんから、「神は唯一であり、神と人との間の仲介者も、人であるキリスト・イエスただおひとりなのです。」(1テモ2:5) マリアの役割は、「唯一の仲介者であるキリストの尊厳と効力から何ものをも取り去らず、また何ものをも付加しないという意味に解釈されなければならない」(教会憲章62) のです。その上でなお、「教会はこのような従属的なマリアの役割をためらわず宣言し、絶えずこれを経験し、なおこの母の保護に支えられて、仲介者・救い主にいっそう親密に一致するよう、これを信者の心に勧める」(同) と、述べられています。

9月5日(年間第23主日) 現代のキリスト信者の宗教観は、一般に著しく主観主義的な傾向に傾いており、人間中心の現世的要求を満足させてくれる手段ないし対象となっています。キリスト教は個人の内面的な宗教心に満足を与えてくれるもの、社会や世界の平和と繁栄に貢献するものでなければならないと、多くの人が考えています。“神は人のためにあるのであって、人が神のために造られたのではない” というような、聖書の主張とは全く正反対の浅薄な宗教観が人々の心を支配しており、終末的な希望や私たちを天の聖所に入らせる(ヘブ10:19)キリストの尊い血(1ペト1:19)への信仰とは無縁になっています。

9月26日(年間第26主日) 使徒パウロ以来、競技をすることがキリスト者の生き方の譬に好んで用いられるようになりました(1コリ9:24-27、フィリ3:13-14)。オリンピックで金メダルを獲ることを目標にするように、「信仰の戦いを立派に戦い抜き、永遠の命を手に入れなさい」(v.12)。この人生の競技は、「立派に信仰を表明した」(v.12) 洗礼の秘跡から始まりました。「この掟を守りなさい」(v.14) とは、何か特別な戒律のことであるよりも、むしろ使徒たちが伝えた福音に生きる忠実さと理解するのが正しいでしょう。その福音のいわば基調が、「わたしたちの主イエス・キリストが再び来られるときまで」(v.14) なのです。

10月3日(年間第27主日) 預言者ハバククの訴えに対して、主は神の救済史の将来に関わる幻を示して、これをだれもが読めるように板の上に記せと言われました。これを現代風に言い換えれば、車を運転しながらでも読めるように大きな看板にディスプレイせよという意味です。そして有名な「神に従う人は信仰によって生きる」(2:4) という言葉が語られました。ここで“信仰”と訳されている言葉は、アーメン(真実)の派生語で、主への忠誠と信頼を意味しています。神の恵みや裁きの実行を人間が指図することが信仰ではない……、そうではなくてただ神に信頼し、その御業の進行と展開を素直に受け入れることが“信仰” なのだと、主は答えられたのでした。

10月24日(年間第30主日) 使徒とは、「神の福音のために」(ロマ1:1)「イエス・キリストと、キリストを死者の中から復活させた父なる神とによって」(ガラ1:1) 召された人々であります。代々の教会はこの使徒たちの宣教を通して福音を聞いて来ました。司教とこれに従属する司祭たちの説教はこの使徒たちの宣教の継続であり、これに何か新しいことを追加するものではありません(教会憲章25参照)。“教導職は神のことばの上にある者ではなく、むしろこれに奉仕し、伝えられたことだけを教えるのである”(神の啓示に関する教義憲章10)。

11月14日(年間第33主日) キリストの福音は“世の終わり”(v.9)に関わる“神の国の福音”(ルカ4:43)であって、教会は代々にわたって“私たちの希望、救い主イエス・キリストが来られるのを待ち望んで”来ました(ルカ21:27)。使徒たちはこの福音の証人となった人々でありました。彼らはこの福音のためあるいは迫害を受け、あるいは殉教の死を遂げました。そしてそれはキリストとその福音を証しする最高の機

会となったのでした。

- 11月21日(王であるキリスト) 典礼暦は、代々のキリスト者が「天に蓄えられている希望」(コロ 1:5)「(使徒たちから)聞いた福音の希望」(コロ 1:23) から離れないために、大切な役割を果たして来ました。司教たちや司祭たちの大部分が福音の終末的意義を忘れてしまった時代にも、天上のキリストは主日のミサの聖書朗読を通して私たち会衆に語り続けて来られました。私たちのミサを司る司祭は今朝も再び唱えます。「私たちの希望、救い主イエス・キリストが来られるのを待ち望んでいます。」 それに應えて会衆一同も声をそろえます。「国と力と栄光は、限りなくあなたのもの。」
- 12月5日(待降節第2主日) 異邦人キリスト者である私たちは、「以前には……キリストとかかわりなく、イスラエルの民に属さず、約束を含む契約と関係なく」(エフェ 2:11-12) 生きていたこと、しかし今やキリストの血によって神の国をユダヤ人と「一緒に受け継ぐ者」(エフェ 3:6) とされたことを、聖書によって知るので。共に神の国の国籍を与えられて、「そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを待っている」(フィリ 3:20) という感謝と希望による一致を、今年も教会は大切にしようと呼びかけられています。「わたしたちは皆、神の裁きの座の前に立つのです。」(ロマ 14:10)
- 12月25日(主の降誕) 降誕節は、人間のあらゆる不信仰にも拘わらず、神がその救済史の“終わりの時代”を開始されたことへの教会の信仰宣言であります。救済史の主体が神であって、人ではないことを、21世紀の教会は再認識すべきです。キリストの福音が、救済史を支えているのです。しかし教会が使徒継承によって受け継いで来たキリストの福音を、聖伝と聖書を通して学ぶことは、これから私たちが始めなければならない課題なのです。21世紀の教会は、目覚めなければなりません。